

業による絆

何処までも
我子を背負って歩いてゆきたい

主よ、憐れみたまえ

この雨の中、この夜の中で
己が生と向き合うなど真っ平です

主よ、憐れみたまえ

僕はこの子の生命を譲り受けたいのです
この子に土下座して、泣きたいのです

主よ、憐れみたまえ

この子はそのために息絶えるやもしれません
それでも僕にはこの子無くしては生きてゆけません

主よ、憐れみたまえ

僕が自ら毒をあおった時に
僕を看取ってくれるのはこの子だけです

ああ、この蜜月の時よ

愛がなくともよいのです、たとえ
そのためにこの子が独り取り残されようとも

主よ、憐れみたまえ

そのためにこそ、僕は生きるでしょう
扉に留金をかけ、世界に背を向けても

ああ、主よ、憐れみたまえ

(1991.6.2)